

# 津波で妹亡くした映画監督、被災地に「集う」 迫る作品の現実味

毎日新聞 2024.3.5



自身が監督した映画の上映会で、来場者の大学生らと交流する佐藤そのみさん（右）。「下の世代に関心を持ってもらえるのはうれしい。何か感じてもらえたことがあったなら」。質問の一つ一つに、誠実に答えていた＝新潟県長岡市で2023年12月10日、北山夏帆撮影

昨年12月、新潟県長岡市の「長岡震災アーカイブセンターきおくみらい」で、2本の映画が上映された。監督の佐藤そのみさん（27）は、東日本大震災の津波で、当時大川小（宮城県石巻市）の6年生だった妹のみずほさんを亡くした。

2本とも映像を学んでいた大学時代に撮影し、劇映画「春をかさねて」は、津波で妹を亡くした14歳が主人公。違う制服の生徒が同じ学校で学ぶ間借り校舎の生活、繰り返し訪れるマスコミの取材。自身の経験と向き合った作品は現実味をもって観客に迫る。

大川小では児童74人、教員10人が亡くなった。中学生だったそのみさんは、我が子を亡くした大人たちの苦しみの陰で自分の気持ちを表現できない思春期を過ごした。

高校、大学と進学しても、恋愛やサークル、飲み会といった同世代が当たり前を楽しむ世界を拒否していたという。「震災で妹を亡くした自分には一心に向き合うべき大切なことがあり、それ以外は不謹慎でやってはいけないことと思い込んでいた」。わざと一人になって、映画や本や勉強にのめり込んだ。

一方、「思い詰めた時間があったからこそ、作品ができた」とも受け止めている。映画には、あの頃の同世代に向けて「好きに生きて良いんだよ」というメッセージを込めた。

2月、熊本県水俣市で水俣病の語り部や若い世代と交流した。悲しい出来事を大切に語り継いでいることを知り、「故郷との距離の取り方に悩んでいたが、私が映画でやりたいことはこういうことなのではないかと、少し道筋が見えた」と前を向いた。

実は、映画の完成直後は「あまりにも自分そのもので、人に見られるのが苦しかった」という。しかし、上映会を重ね、たくさんの学びを得てからは少しずつ自信が持てるようになった。「今は自由な感想を抱いてほしいと思える。私自身が成長して、作品から離れられたのかな」

今後も上映会は続く。18日に仙台市で、23日に東京都内で行われる。詳細は